

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32688

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02880

研究課題名（和文）日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究

研究課題名（英文）Research for JSL Learners' difficulties when reading Japanese Novel, and developing teaching material in class

研究代表者

藤原 未雪 (Fujiwara, Miyuki)

和光大学・表現学部・講師

研究者番号：60793221

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語、韓国語、中国語をそれぞれ母語とする上級日本語学習者が、日本語で書かれた小説を読んだときに、どのような理解困難点や誤読があるかを明らかにした。それらがテキストや読み手特性（母語など）とどのような関係があるか、また、なぜそれが起こり、それが起こるとどうなるかについて明らかにした。学習者の母語別に見た読解の特徴を明らかにし、その知見は母語別の日本語教育に応用できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、学習者の母語を使って調査をすることで、これまで明らかになっていなかった、学習者がテキストを読んだときの読解過程の詳細を捉えることができた。第二言語読解における理解困難点や誤読について、なぜそれが起こるのか、それが起こるとどうなるのかについて明らかにした。読解過程は雑多なものであるが、どのように雑多であるのか、その中身をできるだけ記述できた。このことは、外国語教育の関係者や、人間の理解に関心がある心理学分野の関係者、そして、テキストを研究対象とする言語学分野の関係者の関心を引く内容であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the difficulties and miscomprehension when advanced English-, Korean-, and Chinese-speaking learners of Japanese read a Japanese novel. This study has also revealed that how their difficulties and miscomprehension relate to the text and reader characteristics, and they could happen when reading. The features in reading comprehension have been analyzed by mother tongues, and the research findings can be applied to Japanese language education.

研究分野：文章理解研究

キーワード：読解 小説 上級日本語学習者 理解 読解困難点 誤読

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

読解に関する研究は、認知心理学や情報処理など様々な分野で研究対象となっている。本研究は第二言語習得の読解研究に位置する。第二言語の読解とは、すでに母語が獲得されている上で、習得途上の外国語のテキストを理解することである。その処理は複雑で、母語の読解能力がどれくらい影響するか、推論はどこで行われるかなど、未解明の点も多い。また、テキスト理解は、テキストと読み手の相互作用と言われる。読み手の理解活動なしにテキストの意味を考えることはできないが、両者は別々に論じられてきた。例えば、テキスト自体の研究は言語学の分野でテキスト構造や結束性などの言語的特徴の分析が行われ(cf. Halliday & Hasan 1976)、一方、読み手の理解的側面については、心理学の分野で実証的データが蓄積された(cf. van Dijk & Kintsch 1983)。現実の言語運用に即したテキスト解釈の解明には、テキスト研究と読み手の理解過程の研究という双方向のアプローチが待たれていた。近年研究が進んだ第二言語習得の知見も取り入れる必要がある。本研究はこれらを立体的、複眼的に考えるアプローチを試みた。

未解決の課題として次のようなことが挙げられた。

- [1] 理解研究の立ち遅れ：理解についての研究は産出についての研究よりも立ち遅れている。
また、英語テキストを扱った研究はある程度進んでいるが、日本語での研究自体はいまだに少ない。とくに、小説を扱った研究や、同じ材料文を母語が異なる学習者に読んでもらって比較した研究は非常に少ない。テキストの言語形式のどのような点が理解困難点になりやすく、それをどのように解釈しているかという素朴な疑問に十分に答えていない。
- [2] 言語形式の解読の軽視：従来の読解研究は主に心理学で進められ、そこではアイディアユニットの分析など意味重視であった。読み手は言語形式から意味を見出す以上、言語形式とそこから作り出される意味の対応を明らかにすることは欠かせないはずだが、言語形式の解読は軽視されてきた。
- [3] 統合的に分析した研究が少ない：語句や文の意味の推測に焦点をあてた山方(2008)や、ストラテジーに着目した舘岡(2001)などがあるが、これらは読解に影響する個別要因を取り出しているにすぎず、読解過程の鳥瞰図を得にくい。統合的な分析が必要である。
- [4] 一文を超えた理解を研究対象としていない：語彙の意味類推やテキスト理解の研究では、実験文は一文レベルや語句レベルであることが多く(cf. 石黒(他)2020)、一文を超えた理解を研究対象としたものは僅少である。テキスト理解を研究対象とするなら、テキストを一編すべて読んだときに、どのような解釈をするかを調査する必要がある。

2. 研究の目的

研究の目的は次のようなものである。

- [1] 英語、韓国語、中国語をそれぞれ母語とする学習者によって、日本語で書かれた小説がどのように解釈されるかを明らかにする。その解釈がテキストや読み手の母語とどのような関係があるか明らかにする。
- [2] 読解で見られる理解困難点や誤読(読み誤り)にはどのようなものがあり、それがテキストや読み手特性(母語など)とどのような関係があるか、また、なぜそれが起こり、それが起こるとどうなるかについて明らかにする。
- [3] 上級日本語学習者と日本語母語話者の読解過程を比較した場合、共通の特徴や学習者独自の特徴があるか、また、正しく解釈できる人と誤読する人の読み方に違いはあるかを明らかにする。同じテキストを読み、どこまでが共通理解とされ、また、どこからが誤読とみなされるのかについて明らかにし、テキストと人間の関係性の限界を示す。

[4] 母語別の読解の特徴について、質的分析と量的分析の両面で捉える。

[5] 学習者の母語別に見た読解の特徴を明らかにし、その知見を母語別の日本語教育に応用する。また、日本語母語話者との共通点や相違点も明らかにする。

3. 研究の方法

【研究方法】

材料文を言語学的に分析し、読解上の困難点を予測した。英語・韓国語・中国語の翻訳テキストと日本語テキストを対照し、学習者の母語別の読解上の困難点を予測した。材料文として、森絵都(2005)「彼女の彼の特別な日、彼の彼女の特別な日」を用いた。

協力者に材料文を読みながら母語で口頭翻訳してもらい、理解した内容や困難点などを語ってもらった。また、調査者からの質問にもこたえてもらった。質問は の分析内容を参考にした。協力者と調査者のやりとりについては通訳者に依頼し、同時通訳をしてもらった。それをICレコーダーで録音し、調査終了後に文字化した。

調査協力者は、英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者、各20名、計60名と、日本語母語話者20名である

4. 研究成果

結論1：小説読解において、学習者の誤った語義解釈をつくる要因として次のことを明らかにした。

(a) 漢字の字形認識における誤り、(b)音韻情報の使用における誤り、(c)語の構成要素の分析における誤り、(d)多義的な表現の解釈における誤り。

結論2：小説読解では登場人物を指示する要素の理解が文脈理解の指標となる。学習者がその指標である(a)会話文で非明示である発話主、(b)ゼロ代名詞、(c)非明示のノ格名詞句、(d)人称詞を適切に理解しているか調査した結果、韓国語母語話者は英語・中国語母語話者より誤読が少なかったが、これは日本語との文法や語順、談話構造の類似性が影響したことが示唆された。

結論3：調査データに定量的な分析を行った。学習者の誤読の種類は「語義」と「文法」に分けられた。母語別の誤読数の平均値の差を1要因分散分析で検討した結果、例えば、「発話主の特定の誤り」では中国語母語話者は韓国語母語話者より多いこと、また、「語義全体の誤り」では韓国語母語話者は英語、中国語母語話者より多いことが明らかになった。

以下に母語別の特徴について文法と語義の面から分けて述べていく。

文法の誤読

文法の誤読では、韓国語母語話者は英語・中国語母語話者よりも誤読が少なかった。その理由として、日本語と韓国語は語順や文構造(助詞や格関係など)が類似している一方、英語と中国語は日本語の語順や文構造と対立することが多いため、解釈に負担がかかることが考えられた。これはテキスト理解を決定する要因のうちのL2読解要因が大きく影響していると考えられる。文構造の誤読は韓国語母語話者には見られなかったが、これは本研究で扱った小説に出現するような文の長さでは、文法の理解に困難は少なかった可能性がある。また、日本語で非明示となって

いる要素が母語では義務的に明示されることの多い英語母語話者と中国語母語話者にとって、その特定は読解困難になると予想された。実際、フォローアップインタビューにおいても、英語・中国語母語話者はゼロ代名詞や、非明示となっている発話主の特定が難しいと言及することが多かった。一方、韓国語母語話者は、文法についてのコメントは少なく、漢字や語句の組み合わせに言及することが多かった。中国語母語話者は、発話主の誤読が多かったものの、フォローアップインタビューでは、それについての発言はなく、誤読したことに気づいていないことが窺える。

文法に関連して、英語母語話者に特徴的に見られたコメントについて述べる。読解時やフォローアップインタビューでは、物語冒頭の場面設定の理解、具体的には会話の発話主や地の文の語り手を特定することの困難にしばしば言及した。たとえば次のようなコメントである。「この彼とあの彼の違いがわからない」、「小説の始めが難しい」、「1編目の会話で混乱した。背景が理解できなかった」、「彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった」の「彼」はバーの男？元彼？」、「迷ったところは、語り手が自分自身に話をしている、対話じゃない部分」、「新郎」という言葉がでてきて、やっと主人公は女性だとわかった」、「2編目。主人公が元彼かバーの男かはわからない」、「発話内容がこの(当該文)の前を指すのか後を指すのか迷っている」、「今は後悔の塊」これは誰が話しているか迷う。会話なのか、胸の中で自分に言っているのか。日本語の小説では視点の統一によって、人称詞の使い分けや、ゼロ代名詞の使用が多くなるが、そのような要素を読み解くのが困難になっていることが推測される。これはテキスト理解を決定する要因のうちのテキスト要因がとくに影響している可能性がある。

語義の誤読

韓国語母語話者は英語・中国語母語話者よりも語義の誤読が多かった。定量的な分析においても、「字形認識の誤り」では中国語母語話者よりも、「語義全体の誤り」では英語、中国語母語話者よりも有意に多かった。

一番語義の誤読が少ない中国語母語話者は、母語に漢字を持つため、漢字の字形の認識や意味の推測が容易であったと説明がつくのではないだろうか。第二言語の日本語の漢字語の語彙処理では、中国語母語話者に強い表記類似性効果がみられ、同じ期間日本語を学習した英語母語話者に比べて、漢字語の処理が極めて迅速である。また、韓国語母語話者には、表記類似性効果が見られないという研究もある。では、ともに非漢字圏でありながら韓国語母語話者が英語母語話者より語義の誤読が多いのはなぜだろうか。これについて母語背景から考察してみる。韓国語は日本語の漢字語と音を共有するケースが多いため、そこから語を推測できるものもある(例：以前、完全)。「漢字語彙を処理する際に、書字から意味へ直接アクセスするか、または、L1の音韻符号化を経て意味にアクセスする」という研究結果もある。そのため、韓国語母語話者は普段から音韻情報や既知の漢字を手がかりにして積極的に未知語の推測を行う傾向にあるのではないだろうか。これは、意味表象へのアクセスは、視覚入力よりも聴覚入力は促進されやすい可能性があるという指摘とも一致する。しかし、その反面、そのストラテジーに依存しすぎて、誤った解釈に至ることもあると考えられる。誤った解釈でも文脈に合えば、解釈の修整は起こらない。また、韓国語母語話者は漢字の字形認識の誤りが多く、字形を曖昧に処理することが英語・中国語母語話者に比べて多かった。実際、フォローアップインタビューにおいても、漢字について困難点を述べる事が多かった。

一方、英語母語話者にとって、英語由来の外来語以外は、韓国語母語話者と違って日本語と語彙を共有しない。また、漢字は完全に学習言語であるため、解釈に自信が持てないことも多い。

英語母語話者は、音韻情報に依存した単語認知処理をすること、漢字の画数が多いと処理が困難であることも指摘されている。そのような意識があるため、字形が認識できない語や意味のわからない語があれば、辞書で調べる回数が多くなった可能性がある。その1人当たりの平均値を見ると、英語母語話者は26.3、韓国語母語話者は16.5、中国語母語話者は15.8である。このように、英語母語話者は韓国語・中国語母語話者よりも辞書で調べる回数が平均で約10回も多い。英語母語話者にとって、辞書を頻繁に引くことが語義で誤読する頻度を少なくすることに繋がった可能性がある。ここから考えると、語義の誤読は辞書を使用することで解決できる場合が多いことが示唆される。読解中に辞書を引くことは認知負担が高いとも言われており、それを避ける学習者も多い。今回協力してくれた英語母語話者の読み手特性を考えると、普段から辞書を駆使して文章を読むことに慣れているという特徴があった。そのような読み手特性が反映した可能性もある。

また、英語母語話者には、音韻情報を使用した次のような誤読もあった。「キザ(な文句)―きざむ(scratchch)」、「ふりむく―皮をむく」、「さしあたり―指でさして」といったものである。これも、音韻情報に依存した単語認知処理の表れを示唆している。さらに、英語母語話者には、韓国語母語話者と同様に字形認識の誤読もあった。「突っぱねて―笑ってね」、「呟いた―眩しい(ブーケの色をぼんやりと思い出している)」、「降参です―彼の名前」のように人名だと誤読したが、英語であれば固有名詞は大文字で書き分けるという規則があるが、日本語ではそれがないため、両言語の書字規則の違いが誤読の誘因となった可能性がある。また、「なりふりかまわずにそう頼んだら」のようにひらがなが長いのは、いらいらする」というコメントは、分かち書きをしない日本語の書字規則、「パーへ」を「bahe」と読み違えるのは、ひらがなの「へ」とカタカナの「へ」が同形であるという日本語の書字形式がもたらす困難点である。

中国語母語話者についても考察を加える。中国語母語話者にとって、漢字は見るだけでも活性化する。中国語は日本語と基本義が共通することが多く、同形語の86%は基本義が共通するとされており、読解における語義解釈には有利である。その反面、調査では「重み」を「繰り返す」と解釈するような母語の干渉による誤読も見られた。この種の誤読は、読解において母語の知識は既存知識として利用されるため、母語の干渉は自然には消えないことと、語彙が処理できると文法には注意が向きにくくなるという研究結果からも説明がつく。また、日本語の「文句」は多義語で、「文言」と「不満」の意味がある。中国語にも「文言」の意味があるが、調査では誤った解釈である「不満」の意味が選択される場合が多かった。両者の単語親密度を見ると、「不満」が6で、「文言」が3.4となっており、「不満」のほうが親密度が高い。よって、「不満」が選択された理由として、本研究の協力者はかなりの程度日本語を学習している上級学習者であったため、日本語の単語の使用環境に馴染んでいたことが影響した可能性がある。

参考文献 石黒圭 (編著) (2020) 『ビジネス文書の応用言語学的研究』 ひつじ書房

館岡洋子(2001) 「読解過程における自問自答と問題解決方略」 『日本語教育』 111, 66-75.

山方純子(2008) 「日本語学習者のテキスト理解における未知語の意味推測 L2 知識と母語背景が及ぼす影響」 『日本語教育』 139, 42-51.

Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976) Cohesion in English. Longman. 安藤貞雄ほか訳(1997) 『テキストはどのように構成されるか 言語の結束性』 ひつじ書房

van Dijk, T. A. and Kintsch, W. (1983) Strategies of discourse comprehension. London: Academic Press, Inc.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤原 未雪	4. 巻 59
2. 論文標題 上級日本語学習者が小説を読むときに見られる誤読	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 読書科学	6. 最初と最後の頁 43～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.59.2_43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤原未雪	4. 巻 10
2. 論文標題 上級日本語学習者の小説読解における誤った語義解釈 中国語・韓国語・英語母語話者の読解過程に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 165～180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原未雪	4. 巻 21
2. 論文標題 小説の文章理解における登場人物を指示する要素の読み誤り 英語・韓国語・中国語を母語とする大学生を対象にした調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 専門日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 21～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 藤原未雪
2. 発表標題 小説読解における誤った語義解釈－日本語上級レベルの中国語・韓国語・英語を母語とする大学生・大学院生の調査から
3. 学会等名 第21回 専門日本語教育学会研究討論会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田尚史・村田裕美子・中島晶子・白石実
2. 発表標題 ヨーロッパの日本語学習者の読解における推測ストラテジー
3. 学会等名 2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野田尚史・穴井宰子・中島晶子・白石実・村田裕美子
2. 発表標題 ヨーロッパの日本語学習者に有益な読解教育
3. 学会等名 第15回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤原未雪・中北美千子
2. 発表標題 小説読解における上級日本語学習者の誤読の特徴 - 中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者を対象に -
3. 学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野田尚史（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ココ出版	5. 総ページ数 278
3. 書名 藤原未雪 第8章 漢字系上級学習者の動的な読解過程（pp.143-162）『日本語学習者の読解過程』	

1. 著者名 石黒圭（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 245
3. 書名 藤原未雪 第2章 語彙の読解指導, pp.30-45 『日本語教師のための実践読解指導』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中北 美千子 (Nakakita Michiko) (00646408)	名古屋外国語大学・世界教養学部・准教授 (33925)	
研究分担者	野田 尚史 (Noda Hisashi) (20144545)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授 (62618)	